
コントラスト

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コントラスト

【Nコード】

N6842P

【作者名】

Litaly

【あらすじ】

檻の中で吠えてる馬鹿を見てほくそ笑む。
なんてみつともない間の抜けた面。

よく見ると、自分の顔だった。

檻の中で吠えてる馬鹿を見てほくそ笑む。
なんてみつともない間の抜けた面。

よく見ると、自分の顔だった。

今朝夢を見た。

別れた恋人と手をつないで川沿いの道を歩く、そんな夢だ。
夢の中で僕たちは笑ってた。

4時の鐘が鳴る川沿いの道を、手を繋いで歩きながら、こつじゃない未来を探してたんだ。

クリスマスが嫌いだ。

去年の今頃どんな気持ちだったか覚えてる。
まるで昨日の事みたいに思いだせる。

明日になれば大きな荷物を抱えて、彼女が多摩までやってくる。
この4畳に満たない狭い部屋で、朝まで二人で過ごすんだ。
気だるい朝を迎えて、前日に食べ残したケーキの残りをたいらげる。

そんな妄想が、現実につっちゃいそうな気すらしてくる。
明日になれば、うちの黒電話がけたたましく鳴って「ねえ、今多摩

着いたから、もうすぐそっち行くよ」「って、彼女が言うんだ。
妙に媚びたような声でさ。

いつも顔色を窺ってるような、いやらしいビッチだった。

最低最悪の僕にはこの上なくお似合いの、最低最悪にいい女だった。

去年の今日と、今年の今日、何も変わっちゃいない。

だけど去年交わされた約束は全て破棄されて、くたびれた顔の男が
一人この薄暗い部屋に残された。

去年の頃は、週に1度は彼女がうちに着てたから、いつもそれな
りに綺麗にしていた。

今はゴミ溜めのようになって、足の踏み場もない。

だけど、何も変わってなんかいないんだ。

ふとパソコンから目を離して玄関の方を見れば、素肌の上に僕の茶
色のカーディガンを羽織った彼女が台所で歯を磨き終えて、こっち
を見てにやけてる。

「りょうの、ご飯とぐ時の姿が妙にサマになってるwww」とかい
って笑ってた、あの時の笑顔で。

全部幻覚だ。

昨日の事のように思い出せる。

彼女と指さして笑った、変な形の電飾のオブジェが去年と同じ場所

でゆらゆら動いてる。

普段なるべく思いださないようにしてるけど、こんな日はどうしても思い出してしまう。

歌いに行く気にもなれない。

見知らぬ誰かが足を止めて、僕の歌を聞いて、言葉をかわす。

その瞬間の僕が、どれだけ薄っぺらい笑みを湛えてるか、容易に想像できるからだ。

クリスマスソングなんて、お金もらったって歌う気になれない。

クリスマスソングが悪いとは思わないけど、今の僕が歌ったって全部インチキにしかない。

年末年始、というか、明日以降の予定がひとつも無い。

多分家の中でひたすらゲームとかして、ごろごろして過ごすんだ。

友達はみんな恋人と夜を過ごすんだろう。

いい事だ。

彼らには幸せになって欲しい。

彼らにはその資格が十分にある。

この寂しさも、虚しさも、全部自業自得だから、今更嘆く気にもなれない。

焼けつくような痛みにも慣れたし、喪失感にも慣れた。

今更それを取り除こうとも思わない。

倦怠感がある。

何者でもない僕は、どこでもない場所に立って、ただなんとなくヘラヘラしてる。

今日も明日も明後日も。

不運ではないと思う。

懐かしめる思い出も、幸福になれる可能性だって僕には与えられた。

今だっってきた。

全部駄目にしてきたのは僕自身だし、今この瞬間を駄目にしてるのも、他でもない僕自身なんだ。

だけどもう、気力が沸かないんだ。

真新しい悲劇への入り口を探すために、1日2時間風呂で皮膚を削ぎ落として、それでもどうにもならないポロポロにひび割れた皮膚に我慢して、痛みとかゆみとたるさと熱に目を瞑って、あえて外に出て行動を起こそうっていう気になれない。

外に出れば皮膚の水分を持ってかれて、その日の夜はかゆみで眠れない。
いくら保湿クリームだとか痒み止め重ね塗りしたって効きやしないんだ。

長時間活動すると、決まって熱が出る。

夕暮れあたりから身体が気だるくなって、意識が朦朧として、熱っぽくなって、寒気がする。

時々、じゃなくて、外に出て活動した日は毎日だ。

そんな事、口にすれば「お前は甘ったれてる」って言われるか、変に同情されて変な空気になるかのどっちかだし、どっちにせようんざりした気分になるって分かってるから、普段は言わない。

言わないから僕と普段顔を合わせてる人たちは皆気づかない。それでいいと思うけど、ただ時々酷く億劫になる。

彼らはただシンプルにその場を楽しんで、僕は熱やら痒みやらを耐えながら作り笑いをしてる。

そういうアレに時々嫌気がさす。

冬は冬で皮膚が怪物みたいになるし、夏は夏で日焼け止めどれだけ塗ろうが、数時間外にいただけで火傷みたいになって、顔も腕もゆでダコみたいになって、皮膚が変質して、一週間くらい治らない。

だからフルタイムの仕事も辞めた。

「今日も夕暮れくらいから体調悪くなるんだな。仕事の後も、何もする気になれないだろうな」って思いながら、毎朝通勤する気力が尽きたからだ。

まともに活動できるのっていったら、春と秋、合わせてもほんの3、4か月程度だ。

無論それだつて毎日2時間近くのケアは欠かせない。

「それをすればどうにかそれなりに活動できる」ってただだ。後の季節はどうしたってどうにもならない。

無理をすれば多少は無理も通るけど、無理をしようっていう気力がもう沸かない。

無理をして手に入れた束の間の幸せだって、僕が揺らげばすぐにこの手から零れ落ちる。

失ってしまったえば、幸福な瞬間の思い出が全て痛みで塗りかえられる。

揺らがないはずと手にしていられるのかもしれないけど、揺らがないでいられる自信なんてない。

肌年齢が、数か月の間に20代から一気に60代になる。

いくら気持ち強く保とうと思っても、数か月続けば簡単に折れる。

毎年「今年こそは」と思うけど、冬が深まる頃には毎年折れる。

そうやって去年も駄目になって、恋人との関係も駄目になった。

「正直肌の状態が芳しくなくて、体調が酷い、だから当分会えない」
って言えなくて、彼女からしたら「なんかりよう最近私に構ってく
れなくなった、急に冷たくなった」としか思えなかつたろう。
彼女が去ったのも無理はない。

意識を強く持って長い冬を耐え凌ごうっていう意欲が年々低下して
きてる。

どうしようもない疲弊感がある。

もうここはうんざりだけど、ここから動く気力が沸かない。

無理をしないで幸せになれたら一番だろうけど、無理をしなければ「普通にする」事すら出来ない。
無理をやめれば、すぐさま病人みたいな生活が待ってる。

もういいじゃないか、事実病人なんだから、いい加減割りきって、ベッドの上で死ぬまで暇を潰して生きてけばいい。
そんな感覚が日増しに強くなる。

檻の中で吠えてる男がいる。

男かどうかすらあやしい。

あれは一体何だ。

お前は一体誰だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6842p/>

コントラスト

2010年12月31日05時36分発行